

2. 黒部川上廊下(昭和38年・39年夏)

小野龍彌

1. はじめに

黒部川と私達の出合は昭和38年に始った。その年は数合沢上流で前途を拒まれ、翌39年上廊下溯行を完遂することができた。偉大なる黒部は今もって私達をして真剣に取組ましめている。

こゝに発表するものは当時の2年間の記録をまとめたものであるが、現在の上廊下とはかなり様子が変わっていることは御承知おき願い度い。

筆者はその後昭和42年8月、ゴムボートによって奥のタル沢より平まで下降しているが、その折、口元のタル沢や廊下沢数合沢間で登山者の列を見て驚いてしまった。東信歩道が修復されたためであるが、これ以上開発の手が入らぬことを念じてやまない。

尚当時の活動日誌は別稿として永森、古谷両君が書いている。本稿末尾には数合沢と廊下沢を簡単に記し、又下廊下はコースタイムのみとした(46.8記)。

2. 日程及メンバー

昭和38年

8月 8日 富山 — 仙人ダム — 十字峠

9日 十字峠 — 平

13日 平 — 七倉尾根 — 大町

メンバー 鈴木、中野、永森、小野

9月 1日 大町 — 針ノ木峠 — 平

2日 平 — 口元タル沢手前

3日 タル沢手前 — 数合沢出合

4日 数合沢 — 核心部引返点 — 数合沢溯行 — 数合のテント場

5日 テント場 — 薬師岳 — 薬師沢出合

6日 出合 — 三俣蓮華 — 湯俣

7日 湯俣 — 大町

メンバー 増瀬、永森、小野

- 8月 2日 大町 — 平
 3日 平 — 五色ヶ原 — 廊下乗越
 4日 乗越 — 廊下沢 — 数合沢出合
 5日 出合 — 金作沢出合
 6日 出合 — 赤牛沢出合 — 奥のタル沢出合
 7日 出合 — 薬師沢出合 — 雲の平
 8日 雲の平 — 岩苔乗越 — 三俣蓮華 — 湯俣
 9日 湯俣 — 葛温泉
 10日 葛 — 大町
 メンバー 三浦、古谷、和田、小野

3. ルート解説

3-1. 平より口元のタル沢まで(昭和 38 年)

平より東沢までは部分的には未完成だが右岸沿いにいい道がひらかれている。ダムのバックウォーターは口元の木挽沢附近、東沢の水量は本流に劣らない。出合附近は広大な河原である。

東沢を右岸より左岸へ渡渉(太もも)次に本流を渡る(太もも) 行きづまれば対岸へと渡りながら熊の沢の小さな出合をすぎ、しばらくして右岸に 45 度余りの岩盤を流れる滑滝に遭遇。更に進むと黒ピンカの屏風がつらなるのを仰ぎながら左岸水面より 20 m 程ブッシュの中を高捲くかすかな踏跡がある。更に岩を乗り越たりして進むと、流れが右へと直角に折れ次いで左へと直角に折れ両岸とも岩壁にかこまれ、流れが狭くなつたところにくる、下の黒ピンカのはじまりである。

右岸の壁には残置ハーケンがあるがここで左岸の草壁をブッシュにつかまって 100 m ばかり登り、上流へとトラバース気味に下り最後は木立をピンにして懸垂下降、降り立ったところのすぐ上流左岸より涸れたルンゼが入り込む。左岸ゆきづまるところ右岸へ(腰)、しばらく小さな高捲きをして岩の段々状を行く。流木の集積したところをすぎ右岸樹林の小さな高台はテントがはれる。左岸より滝となっておちるルンゼを見るところで左岸へ渡渉(腰)、口元の

タル沢の出合まで高さ 50 m 余りの高捲をなし懸垂にて下る。タル沢出合の上流側を右岸へ渡渉（首）、こゝより奥の本流は完全な廊下となって右に曲りこんでゆく。こゝは水量の少ないときのみ通過可能であろう。

3-2. 口元のタル沢より数合沢まで（昭和 38 年）

口元のタル沢左岸本流の右岸にのびてくる細い尾根を登る。踏跡がかすかにある。なおも登ると上流へと水平方向に巾 45 cm ぐらいの小径がのびている：が東信歩道跡である。この小径はブッシュの多いところでは消えてしまが大体水平方向に高捲いて行く。下方には渓音がきこえ時には流れが見える。ルンゼを 4 本越すと径は小尾根をのりこえてルンゼに向って下ってゆく。ブッシュにつかまって懸垂の要領、下りたルンゼは赤茶けたガレが本流へと入っている。

川巾も広くなり廊下沢の出合まで小さな高捲きをしながら右岸どおしに行く。本流が左へ曲ったところに廊下沢が入る。更に右岸を段々状の岩をへつってゆく。数合沢まで両岸共にひらけている。左岸へ渡渉（胸）したところは砂地の快適なキャンプサイトで、すぐ前方が数合沢出合である。

3-3. 数合沢より引返点まで（昭和 38 年）

キャンプサイトの前を右岸に渡る（太もも）。数合沢出合は赤いもろい岩肌である。左岸沿いの本流は赤茶けた壁が流れに没している。右岸の大きな岩をへつって越え更に大岩の上へ追い上げられる。上流へは垂壁となっていて 10 m ばかり下から又前進できるところ。こゝはなお上流へ 10 m ブッシュをトラバースしてモミの木の手首ぐらいのをピンにして 25 m の懸垂下降、更に進むと流れに沿ってぬるぬるした丸い壁が 15 m つゞき、ボルト（太さ 2 cm）の打たれた跡の穴が 2 ~ 3 あるところ小さなホールドに身を託してトラバース、つゞいて磧を越え白いつるつるの丸い岩をトラバース、こゝにはボルトが残っている。いずれも下は深いトロとなって流れている。つゞいて立壁の下、水中をトラバースや進むと右岸は通れなくなる。

左岸は段々状の岩が流れに面しその上は垂壁となっている。上の黒ピンカである。左岸の段々状へ渡渉し（腰）高さ 10 m ばかりの高みを平たく広い岩を上下しながら 60 cm 程進む。前に立っている岩塔状の尾根の突端を境にし

て本流は右に折れている。右壁も逆層立壁がつゞき、その先には白いダンゴのような岩が重なった磧が見える。段々状の岩を下り流れ近くを右に折れこんでいる地点に向って進むと小さな磧がある。

3-4. 廊下沢より金作沢まで（昭和39年）

廊下沢出合の本流右岸には修復された東信歩道の赤ペンキの矢印が上流をさしている。出合上流を右岸へ渡り（ひざ）行きづまるところ左岸へ渡る（すね）38年の快適な砂地のキャンプサイトは岩の河原になっている。数合沢出合附近を右岸へ渡渉（ひざ）こゝは砂地になっておりテントをはるによい。次に左岸へ渡り（太もも）赤茶けた立壁の下を辿って段々状の岩を越え、38年の引返点に到達する。

流れの中の浅瀬に渡り次に右手上流側の巨岩に乗り移り、さらに背丈ぐらいのつるつるの丸く白い岩へ手前の小さな岩よりフリクションではいのぼる。左岸沿いに行きづまる手前で右岸の段々状の岩へ渡る（腰）流れはきつい。段々状の岩を登って下りると上方の森林の中に窓を見せたルンゼに出会う。浮石がつまっているが増水時の高捲きルートになるのであろうか。

更に右岸をゆくと小さな河原となり、その先は垂壁になり、さらに左岸の壁はドーム状に100～150m立ちはだかっているところに出る。流れの巾は10mぐらいでまったくのトロとなっている。その先では流れが1～2mの落差を見せて左岸よりに白い岩が見える。核心部のトロといわれる地点である。

先ず流れの中程のやゝ浅いところへ向って行き、そこより上流を目指す。一步一歩深くなる、進めないほど力が加わる。押し戻され気味に左岸側へ移るとこゝは又浅くなっている。この間約50mで白い岩に達する。白い岩ははい上れずショルダーが必要だが、左岸のツルツルの壁に残置ハーケンもありこの壁を突破する。

こゝより流れは右へ折れ更に左へ曲っている。ピンカより水の潤れたルンゼが入る。なおも左岸沿いに行くといずれの段々も流れに向けて外傾したところへ出る。わらじのフリクションをきかせて歩いたり、上のひさしをかぶんで越えたり、最後は水中にずぶりと入って越える。なおも左岸沿いに行けるが上の

黒ピンカもやゝ明るくなる。滝が本流へ直接落ちているところは壁と落水の間に人間が1人もぐりこめるだけの隙間があるので、そこを通る。そこより楽に壁の下の狭い石の河原をたどると左岸に巾の広い岩壁を落ちる滝と出会い、三本の流れとなって落ちている。このルンゼの上方で流れは左に曲りこんで行く。この曲るところで右岸やゝ上手に向けて渡渉、更に右岸沿いの水中を辿り最後は胸まで水に浸って水面上1m程の垂直の岩をはい登ることになる。浅い割目がポイント。

更に岩の上を行くと右岸より滝のルンゼが入り流れは右へと折れる。右岸の荒々しい河原の先は壁が流れに沈んで行けそうにない。こゝより上流は再び森林の尾根が左肩をグーンと落としているのを見る。右岸行きづまるところ左岸へ渡る。上手には滝が落ちている。この下を通って行くと金作沢の段丘がすぐ前に現われ、川巾はいよいよ広くなる。早瀬を右岸へ渡り次に飛石で左岸へ、さらにゆるい流れを右岸へ渡る（腰）と金作沢出合のすぐ前に出る。充分にテントをはれる。

3-5 金作沢より薬師沢まで（昭和39年）

出合より右岸通しにへつって行く。流れは深いトロの連続となっている。左手より小さなルンゼを迎えて左岸にも岩壁から小滝が出ている。右岸の壁は水中に没して行けないように見えるが狭いバンドをはって進む。

次に右岸よりチムニー状のところを滝が出ている。階段上の岩を下りる。流れは右に曲がり、なおも右岸のツルツルの岩にフリクションや水中のホールドを求めて行く。右岸に大きく右へと曲ったルンゼを迎えてより流れは2mの落差を見せて谷巾も5m程にせばまり、すさまじい流れとなっているところに来る。こゝは奇妙な姿勢をくり返し岩をはい水中に入ってこなす。

谷は左へ曲り、急に広々としたところへ出る。鄭下をぬけ出たのである。なお行くと右岸よりルンゼが入り流れは右に曲る。左岸は立壁となっており、左へ曲ってゆくところで左岸へ渡渉する。左岸は石の河原となり、ついで右岸が立壁となる。こゝで右岸へ渡って立壁を越える。薬師岳より沢が入ってくる。なおも右岸を行くとまた薬師岳よりの沢が入る。右岸は広い段丘地で右岸にも水量の

多いルンゼが入る。本流はトロとなり白い岩肌のところより左に折れる。

左岸へ渡渉し白いツルツルの岩をトラバースする。本流は左へ左へと曲って浅瀬とトロの連続である。左岸より薬師岳よりの三本目の沢が入る。両岸とも垂壁となって油のようなトロが流れる。こゝはトラバースして越える。こゝから本流は右へ曲る。さらに左岸を行くと大きな沢が入る赤牛沢である。出合手前で右岸へ渡る森林は川身まで下りている。右岸は荒れているので左岸へ渡る。奥のタル沢の広々としたところが見えてくる。右岸へ奥のタル沢の前で渡ると岩小屋はすぐ近くである。上流への細々とした踏跡が確認される。

出合より本流は両岸壁つづきとなって廊下状であるが、右岸沿いの高捲きルートに入る。次第に本流が開けるところでこの踏跡は川身に出ている。右岸通せまい石の河原を行く。左岸よりかなり大きいルンゼをむかえて、すぐ右岸へ30mばかりの立塔を見る。これが立石である。更に右岸を行くと対岸に広々とした沢がモレーンをともなって入っている。本流は左にゆるやかにカーブして眼前に雲の平の台地が見えてくる。ここで流れは右へと折れる。川身も開けて左岸へつづいて右岸へと渡る（足首）

なおも行くと右岸は壁が水中に没し高捲きルートがある。2本の細い滝のルンゼを迎えるところで本流は右へと折れ込む。そこからは又両岸共廊下状となりトロと早瀬がつづいている。ケルンに導かれて高捲きの踏跡へと入る。この径はルンゼへと下る。このルンゼは本流へ滝となって入っている。ふたたびケルンに導かれるが踏跡を見失ってブッシュをこいで行くと次のルンゼに出る。

このルンゼは狭いトユ状となっている。これを下りると下りたところは両岸壁つづきだが右岸沿いを行ける。見失った高捲きルートは3本目のルンゼを下りていた。ここが上廊下の出口であり入口であり、ここより踏跡も道となりピッヂが上る。左岸より大きな沢が入ってくる。やがて吊橋が見え薬師沢出合へと達する。

3-6 薬師沢より源流まで（昭和38年）

出合より左岸を行く。赤城沢出合附近はトロとなり、その上は本流全体が4～5mの落差を見せている。大体左岸沿いに川身に出たり高捲いたり踏跡をた

どって進む。五郎沢出合の中洲より右岸へ移る。本流は小さく規模を変え、巨岩巨石の河原つづきとなる。祖母沢祖父沢をすぎてまもなく二股に着く。左折すれば岩苔乗越、右すれば鷺羽乗越え出る。いずれも道が通じている。

3-7 数合沢（昭和38年）

数合沢の出合は赤い岩肌が印象的である。水量は廊下沢より多いだろう。沢の奥には数合乗越と数合小屋との間にピークが見えている。入口よりもなく $20m$ くらいの赤くもろい滝が落ちている。ここは大きく崩壊した右岸を高くブッシュをこいで下り立つ。小滝をすぎて更に何段にも重なり合った滝にぶつかる。左岸よりは滑滝が落ち、どちらの岩ももろく且つ濡れてすべりやすい。右岸の草壁を登って高くブッシュに入る。樺としゃくなげと強尽な細い竹がびっしりと急斜面をうづめ、大変なアルバイトである。とにかく上流へのトラバースに全力をかけねばならない。ブッシュ帯の下は岩である。やがて適当なところで沢身に下りてなおも行くと二股になっている。平凡な沢を進むと水も消えてくる。（小滝のところで大熊と出合った） 細い溝状になるころ乗越えて登りつく。〔出合より数合乗越まで約3時間〕

3-8 廊下沢下降（昭和39年）

廊下沢の源頭は廊下乗越である。乗越へ入るには越中沢乗越をすぎて越中岳へ向うところより左へと捲いて行き花崗岩の巨石の積み重なる中を下ればよい。乗越の越中沢側は小雪渓とお花畠とハイマツのあるザラ場で小型テントを1張り設営する空地以外ない。雪渓がなくなれば廊下沢を下って潜流の現われる所でテントをはらねばならない。廊下沢側はハイマツでうまっている。

ハイマツの海を下ると樺やブッシュにかくれた石の渓が現われてくる。この石渓に入ってブッシュをさけながら降りると約45分で広い石の河原に出る。これより沢は勾配を増してくる。潜流となっていた水が一度にあふれ出してくるところで飛石づたいとなる。広くゆるい沢をどんどん下りると右手から赤くもろい壁をもった滝のルンゼが出来合う。数合の頭付近より発したものであろう。

赤牛岳の濃密な森林が眼前にひろがっている。 $2m$ 程の滝と小さな淵をこえる頃、黒部の本流に接した赤牛の壁が迫ってきてついに本流に出る。悪場のな

い沢である。〔乗越より黒部出合まで約2時間40分〕

4. コースタイム

下ノ廊下

仙人ダム — 0.15 — 東谷 — 1.55 — 十字峠 — 0.40 — 下の
タル沢 — 0.45 — 別山沢 — 0.35 — 新越沢 — 0.15 — 鳴沢小沢
— 0.25 — 鳴沢 0.15 — 内藏之助沢 — 0.30 — 赤沢
黒四ダム上部 — 0.50 — 御山谷 — 1.55 — 中の谷 — 0.50 — 平
(昭和38年)

上ノ廊下

平 — 0.25 — 口元の木挽沢 — 1.35 — 東沢 — 0.35 — 熊の沢
— 0.45 — 滑滝 — 0.45 — 黒ピンカ — 3.05 — 口元のタル沢手
前滝のルンゼ対岸幕営地 — 1.05 — 口元のタル沢 — 1.50 — 廊下沢
— 0.40 — 数合沢手前 — 0.10 — 数合沢 — 1.30 — 引返点 (昭
和38年)

廊下沢 — 0.20 — 数合沢 — 0.10 — 幕営地 — 3.35 — 金作沢
— 0.40 — 廊下を抜ける — 2.55 — 赤牛沢 — 0.30 — 奥のタル
沢 — 0.30 — 立石の立塔 — 2.30 — ルンゼ下降点 — 0.45 — 薬
師沢 (昭和39年)

源流部

薬師沢 — 1.05 — 赤城沢 — 1.15 — 黒沢五郎沢 — 2.30 — 二
股をへて鷲羽乗越 (昭和38年)
岩苔乗越 — 0.30 — 二股 — 0.50 — 鷲羽乗越 (昭和39年)

黒部川源流概念図

1:50,000

